

成田悠輔 著 『22世紀の民主主義：選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』（SBクリエイティブ、2022年）

杉谷 和哉*

1. 本書の概要

「若者が選挙に行って『政治参加』したくらいでは何も変わらない」と挑発的な言葉が躍る帯を装いに出版された本書は、歯に衣着せぬ発言と明晰な頭脳をもって、多くのメディアに露出し、今や飛ぶ鳥を落とす勢いと言っても過言ではない経済学者、成田悠輔氏による初の単著である。話題性抜群ということもあって、各所で高い売り上げ記録を達成しており、成田氏の勢いが伺える。

本書の内容は次の通りである。冒頭で、本書全体の要約がなされる。これは言うなれば、エグゼクティブ・サマリーのようなもので、これに目を通すだけで、本書の骨子は把握できるようになっている。

第一章「故障」では、民主主義が機能不全に陥っている事実が、多くのデータを用いて示される。具体的には、新型コロナウイルス感染症への対策や、経済のパフォーマンスなどが、民主主義国である場合には劣悪なものにとどまったと論じられている。特徴的なのは、民主主義批判にありがちな、いわゆる「衆愚論」でこうした事情を説明するのではなく、インターネット及びSNSの発達が、この事態の引き金を引いたとする点である。メディアの発達によって、人々の意見が縦横無尽に飛び交うようになった果てに、民主主義の機能不全が起きていると成田氏は論じる。そして、選挙という古い手法に限界があると問題提起がなされる。

第二章「闘争」では、こうした絶望的な事態に

対抗すべく、様々な対抗策が検討される。具体的には、政治家や政府のパフォーマンスを向上させるための改革案、メディアの規制、世代間格差縮小のための選挙制度改革、電子投票を含めた投票システムのアップデート等である。これらの議論を概観し、その意義を一定程度は認めつつも、根本的な問題解決にはならないと論じる。

第三章「逃走」では、こうした行き詰まりを抱える社会から脱出する試みが論じられる。タックス・ハイブンをはじめ、既にこうした実践はいくつか見られ、成田氏も一部の取組みにはシンパシーを覚えているようである。しかしながら、これらは興味深くはあるものの、問題から文字通り「逃げている」だけであり、やはり問題解決には繋がらないという点で、採るべき戦術ではないとされる。

第四章「構想」では、いよいよ本書が採用する「22世紀の民主主義」の在り方が開陳される。様々なデータや実践を交えて壮大な構想が語られているが、煎じ詰めればそれは、「選挙抜きの民主主義＝無意識民主主義」という一言に集約される。これは次のようなものである。まず、技術革新によって入手と解析が可能になった、様々なデータを用いることにより、人々の選好を量的に把握できる。続いて、その選考を実現するための、効果のある政策を、エビデンスに基づいて決定する。このプロセスにおいては、選挙も熟議も必要ない。そして何より、政治家がその能力を問われなくなる。

*岩手県立大学総合政策学部 〒020-0693 岩手県滝沢市菓子 152-52 kazuya_s@iwate-pu.ac.jp

このような社会においては、誰が政治家をやってもいいからである。したがって、政治家はマスコットのなキャラクターであっても構わない。ここで本書の副題が回収される。つまり、「政治家はネコになる」のである。

かなり簡単にまとめてしまったが、以上が本書の概要である。挑発的な物言いが随所にあり、筆勢も軽い本書だが、様々な手堅い参考文献と、確かなデータに裏打ちされており、決して安易な思いつきだけで書かれたものではないことが分かる。民主主義の限界が多方面で唱えられる中、出るべくして出た一冊と言うべきだろう。

2. 本書の評価

各所でベストセラーの記録を叩き出し、幅広い読者を得ている本書に対する評価もまた、幅広いものがある。ここでは、評者の観点から三つの問題提起をしておきたい。

第一に、選好を即座に可視化、政策に反映するという、本書が掲げる新たなメカニズムについてである。成田氏自身が認めているように、その過激とも思える筆勢とは裏腹に、本書の内容自体は、実はそれほど真新しいものではない。哲学や思想の議論に慣れ親しんだ人ならば、こうした発想を聞いて真っ先に、哲学者である東浩紀氏による、「一般意志 2.0」を連想するだろう（東 2015）。東氏の構想は、熟議のような民主主義をその枠内で改良しようとする試みに見切りをつけ、グーグルが保有するデータベースを活用することによって、ルソーがかつて唱えた「一般意志」を再現しようとするものであった。

優れたデータサイエンティストとしての側面をもつ成田氏の場合、思想よりも、データサイエンスやアルゴリズムに関する議論に紙幅が多く割かれているのが特徴的であるが、両者の構想は極めてよく似通っている。しかし、かつて「一般意志 2.0」を掲げた東氏は、今は少しそのスタンスを変えているように見える。というのも、その著作が発表されてしばらく経った後に（初版は 2011 年）、ある鼎談の場で次のように発言しているのである。

やはり SNS やビッグデータのテクノロジーによって、みんなの意思がリアルタイムで測れるようになってしまうと、民主主義の内実も変わらなくてはいけないと思います。・・・（一般意志）がリアルタイムに作られるようになると、一般意志そのものが不安定になり、今日の国民の意見と明日の国民の意見は違うということになります（東ほか 2019: 85）。

どうやら、「一般意志 2.0」を発表した時と比べて、東氏はリアルタイムで民意を把握できる仕組みに対しては、ネガティブな感情を抱いているようである。この鼎談を一読しても、その確固たる理由は判然としないのだが、少なくとも、選好がコロコロ変わることが可視化される社会が必ずしもいいものとは言えない、と東氏は考えていると見てよいだろう。

翻って成田氏は、先にも確認した通り、選挙というメカニズムがあまりに旧態依然としていることを批判する。それはリアルタイムで民意を把握できない上、偏った民意を反映させてしまうからである。

では、こうした選挙のような、速度が遅いメカニズムは本当にデメリットしかないのだろうか？リアルタイムに膨大な民意が可視化できるシステムが実装された場合、それこそ今日の意見と明日の意見が異なるということが明らかになり、かえって意思決定が不能な状態に陥るのではないだろうか。もちろん、こうした事態は、民意の可視化をどの程度のものにするかといった論点を丁寧に吟味することによって回避可能であるかもしれない。しかし、「選好が即座に可視化・集計されて実現するのはよいことだ」という前提そのものについて、我々は疑いをかけるべきと言えないだろうか。

二つ目が、「エビデンスに基づく政策」に関する論点である。成田氏は、本書とは別の論考で、「エビデンスに基づく政策」は現状では、不安定な政治的な意向に左右されてしまうことから、所詮は権力の提灯持ちに過ぎないと批判し、「エビデン

スに基づく目的形成」が採るべき道だと主張している（成田2019）。この主張は、本書では「無意識民主主義」のパーツの一つである「エビデンスに基づく目的発見」及び、「エビデンスに基づく価値判断」へと進化を遂げている。これらは要するに、無意識下での人々の様々な行動から得られたデータの解析を通じて、何が優先的な 이슈とされているのか、どういった判断を好ましいものと考えているのかを明らかにするという構想である。この構想下では、政治家という存在は全く介在しないため、バイアスを完全に除去した状態で政策決定が可能である。成田氏は、このような前提をおいてはじめて、エビデンスに基づく政策は有効に機能すると考えているようである。

エビデンスに基づく政策において、政治権力をどう考えるかという論点は常に課題として付きまどってきた。実際、エビデンスに基づく政策の重要性を主張する議論の多くは、政治や権力という論点を、ほとんど取り扱ってこなかったのも事実である。したがって、エビデンス・ベースの社会構想を最大限にまで突き詰めれば、成田氏が唱道するようなモデルになる可能性も十分にあり得るだろう。

しかし、「エビデンスに基づく価値判断」というタームを聞いて、ただちにある疑問が思い浮かぶ。それは、「価値判断」とは果たしてエビデンスに基づいて行えるものなのか？ということに他ならない。たとえば、憲法九条の改正という問題がある。これは、長らく改憲派と護憲派の対立テーマとなってきたものだが、その様相は複雑である。というのもこれは、国際政治及び国際情勢をどう見るかという、現状認識に関わる論点でもあり、日本の国家像、追求する理想にも関わり、先の大戦をどう捉えるかといった歴史観にも関連するからである。詰まるところ、憲法九条を改正すべきかどうかは、エビデンスだけでは判断できないのである。

あるいは、高度なアルゴリズムを用いて、人々の選好を適切に判断し、改憲を是とするか護憲を是とするかを判断すればよいとする立場もありえ

るだろう。だが、しばしば実施される世論調査では改憲と護憲は拮抗していることが多い。あるいは、国際情勢の変化によっては、この民意は大きくスイングするかもしれない。こうした不安定な民意をもとに、憲法をその都度変えるのは現実的な方針と言えるだろうか。

これは極端な例かもしれないが、政治や政策に関連する論争的なテーマは他にも存在するだろう。たとえどれだけ優れたアルゴリズムを実装しようと、自動的に民意を集約できるメカニズムを整備しようと、エビデンス・ベースに決定できる（すべき）政策と、そうでない（そうすべきでない）政策があるということを我々は認識しておくべきだろう。

第三に、現代社会を生きる我々が抱える大きな問題の一つである、「ニヒリズム」の問題を挙げておこう。これは、哲学者のフリードリヒ・ニーチェが唱えた概念で、絶対的な存在＝神が消え去り、奉じるべき「価値」が社会から失われた状態を指す。こうした事態に陥った時、人間は生きる目的を失い、「よき生」を問う契機を失う。したがって、ただ生きていること、自らの果てない欲望を充足させることが、生きる目的になる。この意味で、「無意識民主主義」がその目的とする、「各人の選好が可能な限り早く可視化・反映される」社会というのは、ニヒリズムが蔓延した現代から生まれ出でた理想像だと言ってよい。

「無意識民主主義」が掲げる理想の社会像においては、人間の行動や思考は全て、解析可能なデータに還元される。これは一見すると、人間が技術の奴隷と化しているように見えるが、実際にはその技術を拵えたのは人間に他ならない。よってここには、どちらがどちらを支配しているかという関係ではなく、お互いがお互いに影響を及ぼし合う循環構造を見出さなければならない。この構造においては、学問の目的は「真理」を探ることになどなく、有用か否かが問題である。別言すればそれは、因果関係のメカニズムではなく、インプットに対するアウトプットの関係であり、しかもそれは実証的に検証可能なものでなければなら

ない。このように、学問や知識が対象とする事象は、かつてよりも狭くなりつつある。このことにより、人間の生きる意味、よき社会とは何かといった、本来、我々の世界が存立するために必要な要件を吟味する術が失われようとしている。これは言うなれば、ニヒリズムのもたらした結果であり、それを蔓延らせる原因でもある（佐伯2020：第五章、第六章）。

ここで注意しておきたいのは、成田氏が掲げる「無意識民主主義」が論敵として取り上げているのは、「選挙」という手法なのであって、民主主義そのものではない、ということである。そして、民主主義の枠内においては、ある民意がいいか悪いかを判断する基準は存在しえない。「民意」という観測された趨勢が、その正当性を保証するからである。「無意識民主主義」においても、「価値」の是非は問われることはなく、それがバイアスなしに政策に反映されることが良いとされている。成田氏は、民主主義（選挙）を改良すべく提案された案をことごとく、「根本的な解決ではない」と切って捨てているが、選挙ではなく民主主義及びそれに伏在するニヒリズムに真の問題があるとすると、「無意識民主主義」こそ、根本的な解決にはなりえず、むしろ症状を更に悪化させることに繋がると言えはしないだろうか。

ニヒリズムが蔓延し、あらゆる価値が頹落した時代においては、その反動として、ファナティックな言説や壮大な構想、常軌を逸した宗教が現れることがしばしばあり、それはたくさんの悲劇を生んできた。そんな時代にあっても、人間は「生きる意味」を時には問いたくなる生き物であり、その空白に耐えられない存在である。どれだけアルゴリズムが発達しようと、科学技術ではこれを完全に満たすことは決してできない。「神なき世紀」が生み出す、こうした事象に対処するためには、教育をはじめ、別のアプローチも必要となるかもしれない（勝田1998）。

以上、拙いながらも、本書の内容とそれに対する評者の問題提起を記した。本書は、コンパクトながらも手際よく多様な論点を提起しており、本

稿で扱った論点以外にも、たとえば「無意識民主主義」における専門家の役割など、論じるべき点は無数にある。引き続き議論を注視していきたい。

本書の構想は言うなれば、近代が生み出した様々な問題を更なる近代化によって振じ伏せんとする企てである。「神なき世紀=ニヒリズムの時代」を生きる我々が、これを採用するか否かは、今後の我々自身の選択にかかっている。本書の大胆不敵な「未来予測」による、更なる議論の喚起が期待される。

【参考文献】

- 東浩紀（2015）『一般意志2.0：ルソー、フロイト、グーグル』講談社文庫。
- 東浩紀・先崎彰容・佐伯啓思（2019）「現代という病」佐伯啓思監修『ひらく』(1)、A&F。
- 勝田吉太郎（1998）『思想の旅路：神なき世紀の悲劇を見つめて』教文社。
- 佐伯啓思（2020）『近代の虚妄：現代文明論序説』東洋経済新報社。
- 成田悠輔（2019）「『エビデンスに基づく政策』に反対する」『経済セミナー』(707)、53-57頁。